

2022年4月24日 礼拝説教要旨

詩編講解説教106「恩知らずでも」

詩編106：39～48、Iコリント13：4～7

詩編第105編と106編は共にイスラエルの歴史について語る詩編でありまして、それゆえ二つは「双子の詩編」とも呼ばれております。主に105編は族長物語から出エジプトの歴史を振り返る内容であり、また106編は出エジプトからカナン定着後、士師と呼ばれる人たちがギデオンやサムソンが活躍する時代、イスラエル王国が誕生する前の出来事までが記されております。何れにしてもイスラエルの人々が幼い頃から繰り返し聞き、慣れ親しんでいる民族の歴史がここで扱われていると申し上げてよいでしょう。

106編39節「彼らは自分たちの行いによって汚れ、自分たちの業によって淫行に落ちた」ここに「淫行に落ちた」とあります。これは一つの比喻ですが、異教の神々を拝むことを意味しています。まことの神さまを捨てて、他の神々を拝むこと。そのことは士師記にも繰り返されていますが、イスラエルがカナンに入植したあと、その土地の先住民の神々にイスラエルの人々は影響を受けることとなります（士師記2：11～15参照）唯一まことの神さまを捨てて、異教の神々を拝むこと、それが原因となってイスラエルは他の国々に制服され、苦境に立たされることとなります。

このようなことは一度や二度のことではなくイスラエルの歴史はその繰り返しでありました。106編では前半部分で出エジプトの物語も伝えていますが、金の子牛の事件がありました。19～20節（参照）自分たちをエジプトから救い出してくださった神さまよりも、金の子牛、物言わぬ偶像を神として拝むようなことをする。その後のカナン入植後もその土地の神々、偶像を拝む。その都度、神さまの怒りを買ひ、イスラエルは苦境に立たされます。その時は悔い改めるけれども、また同じことを繰り返す。学ばない。どうして繰り返すのか。「彼らは自分たちを救ってくださる神を忘れた」（21節）とあります。つまり忘れるのです。

ある聖書は106編に「忘恩の告白」という表題を付けています。恩を忘れる。確かに人間は忘れやすいものです。特に人から良くしてもらったことは忘れる。反対に人からされた悪いことはいつまでも忘れないということがあります。良いことを忘れやすいのは、そのことを恵みとして捉えていないからです。つまり当たり前と考えている。だから印象に残らない。皆さんも忘れないことがあるとすれば、それは思いがけないことが起こったときだと思います。諦めていたことが叶う。ありえないことが起こった時は忘れないものです。神さまの救いを忘れるのは、どこかでわたしたちはそのことを当たり前と考えている。そうやって当然だと。人間は傲慢なものですから、無意識のうちにもそう考えているのでしょう。だから恵みを忘れるのです。恩を忘れる。

わたしたちは神さまの救いが本来はありえないことを認識する必要があります。救われて当然なのではなく、救われないはずのわたしたちが救われている。赦されるはずのないわたしたちが赦されている。神さまの救いはこの意外性にこそあります。わたしたちが神さまに感謝し続けるとすれば、それはこの意外性を常に覚えることしかありません。本来ありえないことが起きていること。それを繰り返し知ることが大事なのです。

今日読みましたところもその意外性を伝えています。このようなすぐ恩を忘れるような恩知らずなわたしたちに対して、それでも神さまは憐れみをかけてくださいます。

「主は幾度も彼らを助け出そうとされたが、彼らは反抗し、思うままにふるまい、自分たちの罪によって墮落した。主はなお、災いにある彼らを顧み、その叫びを聞き、彼らに対する契約を思い起こし、豊かな慈しみに従って思いなおし、彼らをとりこにしたすべての者が彼らを憐れむように計らわれた」(43～46節)

わたしたち人間同士の関係でも、何度も同じ過ちを繰り返すならば、愛想を尽かされるでしょう。見放されて当然なのです。でも神さまは恩知らずで薄情なわたしたちに対して、どこまでも情に厚く、寛容であられる。繰り返し怒りを鎮め思い直してくださる。これは本来ありえないことです。でも神さまはそのようなわたしたちを忍耐し受け入れてくださる。この意外性こそわたしたちが心に留めたいことです。

どうしてでしょう。そしてその中心には45節にある「彼らに対する契約を思い起こし」ということがあるのです。イスラエルの父祖アブラハム、イサク、ヤコブと結ばれた契約に対してどこまでも忠実でいてくださる。だからこそわたしたちは助かっています。わたしたちがどんなに忘れやすく、恩を仇で返すような者でも、神さまがしっかり契約を守られ、しかも憐れみに富んでおられるからこそ、わたしたちは赦されるのです。でもこのことも決して当たり前ではありません。前回の説教でも触れましたが、契約というのは、本来、契約を交わす両者が契約に対して忠実であることが求められます。一方が契約を裏切るようなことをすればそれは無効になるのです。わたしたちは一方的に契約を裏切っているのですから、これは破棄されて当然です。しかし破棄されないところに意外性があります。

その破棄されない理由として、106編では契約を結ぶ両者をつなぐ仲保者、執り成す者の存在を示します。その中心はモーセです。「主は彼らを滅ぼすと言われたが、主に選ばれた人モーセは破れを担って御前に立ち、彼らを滅ぼそうとする主の怒りをなだめた」(23節)モーセが間に立って、イスラエルの破れを担い、なだめることでイスラエルは救われました。そしてその仲保者の存在がわたしたちにとってイエス・キリストを指し示していることは言うまでもありません。イエス・キリストこそ完全な仲保者としてわたしたちを神さまの御前に執り成し、その関係を繋いでくださった。それゆえにわたしたちはなお契約の中に留まることができる。憐れみを受けることができるのです。

それでもわたしたちはこの恵みを忘れてしまう恩知らずな者です。だから神さまに対する不敬を繰り返すのです。神さまに対する不敬を繰り返す人は、人に対しても不敬を繰り返すでしょう。それゆえにわたしたちはここに集まり、御言葉を聞き、聖餐にあずかります。これは恵みを忘れないためです。恩を忘れないためです。毎週の礼拝が神さまに対しても人に対しても愛をもって「礼を失せず」(Iコリント13:5)生きることを可能にします。